

災害時における障がいのある子どもの 心身の変化に関する研究

—新潟県中越大震災で被災した保護者を対象とした調査から—

静岡大学 小林 朋子

掛川市立曾我小学校 石川 礼

I. はじめに

障がいのある人を対象とした震災時の困難・ストレス、そしてそれに対する支援に関する研究は、2008年の段階で21本であったことが報告されている(小林・望月, 2009)。その中で、被災した障がいのある子どもや大人の心身の変化に関する報告は、白橋・横山・谷津・畠山・木村・目黒・小野寺(1980)や宮本(1995)の研究など6本であった。

白橋ら(1980)は、宮城県沖地震で被災した障がいのある子どもと、障がいのない子どもを対象に、地震時ならびにそれに伴う状況変化に対する子どもの反応を調査した。その結果、不安・恐怖反応がどの子どもにも見られたことを明らかにしている。そこから、白橋ら(1980)は障がいのある子どもとそうでない子どもでは、地震のとらえ方や地震への恐怖を伴う即時的な反応には質的な差異がないとしている。

一方で、Yule & Gold(2001)によれば、「知的に遅れを持っている子どもは危機的状况にさらされたときの情緒的(心理的)影響を受けやすい」と述べている。さらに自閉症の子どもへの反応として、「(地震の揺れを)げらげら笑いながら、喜んでいた」というもののあれば、「地震によって窓ガラスが壊れる音を聞き途端に奇

声を発した」、「柵に並べてあったマジックインクが倒れると「駄目、駄目」と叫びパニック状態になった」といった反応があったことが指摘されている(白橋ら, 1980)。白橋ら(1980)はこのような自閉症の子どもへの反応を、不安反応であると同時に、自閉症の特徴である変化への抵抗が表れた結果と考えることが出来ると解釈している。これらのことから災害時には、障がいの有無にかかわらず現れる不安や恐怖反応だけでなく、障がいの特性に関連した心身の変化も現れると考えられる。

宮本(1995)は災害時の障がいのある子どもに生じる問題とその対応に関して、阪神・淡路大震災に被災した特別支援学校(当時は、特殊教育諸学校)の教師を対象に聞き取り調査を行い、身体面、心理・行動面、生活面3カテゴリーで問題点をまとめている。まず身体面での問題点としては、聴覚障がいにおいて「震災1ヵ月後より、聴力が低下」、運動機能障がいにおいて「体重増加不良」、知的障がいにおいて「発熱や怪我、それに伴う欠席の増加」をあげている。心理・行動面での問題点は、視覚障がいにおいて「音に対する過敏反応、退行、自傷(重複障がいの子ども)、恐怖感情、落ち着かない」、聴覚障がいにおいて「多動、失声、恐怖感

情、落ち着かない」、運動機能障がいにおいて「依頼行動の増加」、知的障がいにおいては幅広い問題行動が見られ、「興奮、パニック、奇声、自傷、集中力の低下、多動、自発性・活動性の低下、徘徊、幻覚、妄想着想様言動、排泄障がい、摂食量の低下、過食、恐怖感情、落ち着かない」といったことが指摘されている。学校での問題点としては、全体として「騒々しい、落ち着かない、次の行動に移れない、生活リズムの乱れ」、知的障がいでは「運動時のけが、給食を食べない」、運動機能障がいでは「依頼行動の増加、給食を食べない」があげている。日常生活の問題点は家庭生活において「偏食・きざみ食により炊き出しを食べない、ケアのため水くみにもいけない」、避難生活において「興奮・パニックのため避難所生活が困難、トイレ、入浴の困難」が示されている。

以上のことから、災害を経験した障がいのある子どもの防災対策、そして避難生活をサポートするためには、こうした障がいの特性や程度をふまえて検討される必要がある。また、これまでの研究では教師など支援者が対象となるものが多かったが、災害時に子どもと避難生活を送るのは保護者である。このことから、災害時に保護者が障がいのある我が子の心身の変化をどのように捉えたかについて把握しておく必要があるだろう。

そこで本研究では、新潟県中越大震災を経験した障がいのある子どもを持つ保護者を対象とした調査を行い、災害によって障がいのある子どもの心身の変化について、障がいの特性や程度をふまえて明らかにしたいと考えた。

II. 方法

1. 手続き

調査は、事前に中越大震災で被災した特別支援学校 3 校に調査への協力を依頼し、内諾を得た各校に郵送した。この 3 校に通う児童生徒の保護者 289 名を対象に 2006 年 10 月にアンケートを実施し、調査用紙は在籍学校に提出してもらう形をとった。回収されたものの中で著しく無回答項目が多かった人や、すぐに被災地以外に避難してしまった人は除外したため、最終的に保護者 75 名を分析対象とした。

2. アンケートの構成

(1)地震発生時の保護者と子どものプロフィール

保護者の性別、地震発生時の子どもの学年、子どもの性別、障がい者手帳の等級、療育手帳の等級、自閉症または自閉傾向の診断の有無について回答を求めた(表 1)。

(2)地震発生後の子どもの心身の変化について

小林(2007)および宮本(1995)の災害後の子どもの心身の変化に関する項目から抽出した質問 40 項目を「あてはまる」「あてはまらない」「わからない」の三件法を用いて回答を求めた。また、保護者にとって印象的に残っている心身の変化や特に戸惑いを感じた変化があれば自由に記述してもらった。

III. 結果

1. 障がいのある子どもの災害後の心身の変化

1 割以上の子どもに見られた心身の変化を表 2 に示す。割合の高い順から、「暗がりや怖がるようになった」(33.3%)、「突

表 1. 回答者のプロフィール

性別(保護者)		男	女	合計							
	N	8	67	75							
	%	10.7	89.3	100							
性別(子ども)		男	女	合計							
	N	49	26	75							
	%	65.3	34.7	100							
学年		小1・2	小3・4	小5・6	中1	中2	中3	高1	高2	不明	合計
	N	11	10	9	4	13	9	10	1	8	75
	%	14.7	13.3	12.0	5.3	17.3	12.0	13.3	1.3	10.7	100
療育手帳の種類		A	B	不明	合計						
	N	45	25	5	75						
	%	60.0	33.3	6.7	100						
障害者手帳の等級		1級	2級	3級	4級	6級	不明	合計			
	N	8	1	2	3	1	60	75			
	%	10.7	1.3	2.7	4.0	1.3	80.0	100			
自閉症の診断		あり	なし	不明	合計						
	N	30	39	6	75						
	%	40.0	52.0	8.0	100						

然の大きな音などを怖がるようになった」(32.0%)、「よく眠れていなかった」(24.0%)、「甘えるようになった」(21.3%)、「パニックになることが多くなった」(17.3%)、「行動が落ち着かなくなった」(16.0%)、「よく興奮するようになった」(16.0%)、「笑うことが少なくなった」(14.7%)、「災害での体験や失った体験を繰り返し話していた」(14.7%)、「びくびく怖がっている様が多くなった」(12.0%)、「生活リズムがくずれるようになった」(12.0%)、「奇声を出すことが多くなった」(12.0%)、「食欲が落ちた」(12.0%)、そして「指しゃぶりやつめ噛みなどが見られるようになった」(10.7%)となり、1割を超えたのは40項目中14項目であった。

2. 身体的な障がいのある子どもの心身の変化

災害発生後の心身の変化と身体的な障がいとの関連を調べるために、「身体障がい者手帳の有無」(身体障がい手帳の等級の質問に回答していたものを身体障がい

者手帳ありとし、回答がなかったものを身体障がい者手帳なしとした)と心身の変化に関する40項目のうち「あてはまる」と「あてはまらない」の回答人数について、Fisherの直接確率検定により分析を行ったところ有意差は見られなかった。

3. 知的な障がいのある子どもの災害後の心身の変化

災害発生後の心身の変化と知的な障がいとの関連を調べるために、「療育手帳の等級」(療育手帳Aと療育手帳B)と心身の変化に関する40項目の「あてはまる」と「あてはまらない」の回答人数について、Fisherの直接確率検定により分析を行った。

40項目中1項目の「災害での体験や失った体験を、繰り返えし話していた」($\chi^2(1)=5.04$, $p<.05$) (表3)に有意差が見られた。さらに残差分析を行ったところ、療育手帳Aを持っている子どもに「あてはまらない」が多く、療育手帳Bを持っている子どもに、「あてはまる」が多かっ

た。

表 2. 災害後の障がいのある子どもに現れた心身の変化

項目		あてはまる	あてはまらない	わからない	未回答	合計
1 暗がりや怖がるようになった。	N	25	47	2	1	75
	%	33.3	62.7	2.7	1.3	100.0
2 突然の大きな音などを怖がるようになった。	N	24	47	3	1	75
	%	32.0	62.7	4.0	1.3	100.0
3 よく眠れていなかった。	N	18	53	3	1	75
	%	24.0	70.7	4.0	1.3	100.0
4 甘えるようになった。	N	16	52	6	1	75
	%	21.3	69.3	8.0	1.3	100.0
5 パニックになることが多くなった。	N	13	59	2	1	75
	%	17.3	78.7	2.7	1.3	100.0
6 行動が落ち着かなくなった。	N	12	60	2	1	75
	%	16.0	80.0	2.7	1.3	100.0
7 よく興奮するようになった。	N	12	60	2	1	75
	%	16.0	80.0	2.7	1.3	100.0
8 笑うことが少なくなった。	N	11	62	1	1	75
	%	14.7	82.7	1.3	1.3	100.0
9 災害での体験や失った体験を繰り返し話していた	N	11	58	5	1	75
	%	14.7	77.3	6.7	1.3	100.0
10 ひきひき怖がっている様子が多くなった。	N	9	61	4	1	75
	%	12.0	81.3	5.3	1.3	100.0
11 生活リズムがくずれるようになった。	N	9	66.0	0	0	75
	%	12.0	88.0	0.0	0.0	100.0
12 奇声を出すことが多くなった。	N	9	55	10	1	75
	%	12.0	73.3	13.3	1.3	100.0
13 食欲が落ちた。	N	9	61	4	1	75
	%	12.0	81.3	5.3	1.3	100.0
14 指しゃぶりやつめ噛みなどが見られるようになった。	N	8	60	6	1	75
	%	10.7	80.0	8.0	1.3	100.0
15 ひとりごとが多くなった。	N	7	65	3	0	75
	%	9.3	86.7	4.0	0.0	100.0
16 閉じられた場所に入るのを怖がるようになった。	N	7	59	8	1	75
	%	9.3	78.7	10.7	1.3	100.0
17 いらいらするようになった。	N	7	62	5	1	75
	%	9.3	82.7	6.7	1.3	100.0
18 こたわりが強くなった。	N	6	65	4	0	75
	%	8.0	86.7	5.3	0.0	100.0
19 好きなことでもあまり集中できなくなった。	N	6	62	6	1	75
	%	8.0	82.7	8.0	1.3	100.0
20 おねがいをすることが多くなった。	N	5	66	4	0	75
	%	6.7	88.0	5.3	0.0	100.0
21 トイレが上手にできなくなった。	N	4	69	2	0	75
	%	5.3	92.0	2.7	0.0	100.0
22 しゃべることが少なくなった。	N	3	64	7	1	75
	%	4.0	85.3	9.3	1.3	100.0
23 てんかんになることが多くなった。	N	3	71	0	1	75
	%	4.0	94.7	0.0	1.3	100.0
24 自分を傷つけることが多くなった。	N	3	71	1	0	75
	%	4.0	94.7	1.3	0.0	100.0

表 2. 災害後の障がいのある子どもに現れた心身の変化（続き）

項目		あてはまる	あてはまらない	わからない	未回答	合計
25 ぼーっとして、勉強や遊びなどの活動が少なくなった。	N	3	68	4	0	75
	%	4.0	90.7	5.3	0.0	100.0
26 突然泣いたり、しくしくすることが多くなった。	N	3	65	5	2	75
	%	4.0	86.7	6.7	2.7	100.0
27 人をたたくなどの乱暴な行動が多くなった。	N	3	66	5	1	75
	%	4.0	88.0	6.7	1.3	100.0
28 お腹が痛くなることがあった。	N	2	60	12	1	75
	%	2.7	80.0	16.0	1.3	100.0
29 吐き気をもよおすことが多くなった。	N	2	70	2	1	75
	%	2.7	93.3	2.7	1.3	100.0
30 怖い夢をみるようになった。	N	2	53	19	1	75
	%	2.7	70.7	25.3	1.3	100.0
31 地震ごっこなど、体験を再現した遊びが見られた。	N	2	69	3	1	75
	%	2.7	92.0	4.0	1.3	100.0
32 けいれんが多くなった。	N	2	72	1	0	75
	%	2.7	96.0	1.3	0.0	100.0
33 聞き分けがなくなった。	N	2	67	5	1	75
	%	2.7	89.3	6.7	1.3	100.0
34 おねしやすることが多くなった。	N	2	71	2	0	75
	%	2.7	94.7	2.7	0.0	100.0
35 熱を出すことが多くなった。	N	1	73	1	0	75
	%	1.3	97.3	1.3	0.0	100.0
36 突然なにも動かなくなることが多くなった。	N	1	73	1	0	75
	%	1.3	97.3	1.3	0.0	100.0
37 言葉づかいが荒くなった。	N	1	69	4	1	75
	%	1.3	92.0	5.3	1.3	100.0
38 体に、理由のわからない痛みが起こるようになった。	N	0	64	10	1	75
	%	0.0	85.3	13.3	1.3	100.0
39 家族や友達を避けるようになった。	N	0	69	5	1	75
	%	0.0	92.0	6.7	1.3	100.0
40 頭が痛くなることが多くなった。	N	0	63	11	1	75
	%	0.0	84.0	14.7	1.3	100.0

表 3. 療育手帳の等級と「災害での体験や失った体験を、繰り返かえし話していた」の関連

		「災害での体験や失った体験を繰り返かえし話していた」		合計	
		あてはまる	あてはまらない		
療育手帳	A	度数	4	38	42
		調整済み残差	-2. 2	2. 2	
	B	度数	7	15	22
		調整済み残差	2. 2	-2. 2	
合計		度数	11	53	64

$\chi^2(1) = 5.04, p < .05$

4. 自閉症または自閉傾向のある子どもの心身の変化

災害発生後の心身の変化と自閉症・自閉傾向との関連を調べるために、「自閉症または自閉傾向の診断の有無」と心身の変化40項目で「あてはまる」と「あてはまらない」の回答人数について、Fisherの直接確率検定により分析を行った。

その結果、40項目中2項目に有意差が見られた。「奇声を出すことが多くなった」($\chi^2(1)=5.91, p<.05$)に有意差が見られた(表4)。さらに残差分析を行ったところ、自閉症または自閉傾向の診断がある子どもに「あてはまる」が多く、診断がない子どもに「あてはまらない」が多

かった。さらに、「こだわりが強くなった」($\chi^2(1)=8.74, p<.01$)に有意差が見られた(表5)。残差分析を行ったところ、自閉症・自閉傾向の診断がある子どもに「あてはまる」が多く、診断がない子どもに「あてはまらない」が多かった。

5. 災害発生後の子どもの心身の変化に関する自由記述

災害後の子どもの心身の変化に関する自由記述をKJ法により分類し、分類されたカテゴリーにネーミングを行った。分類、ネーミングは心理学を専門とする大学教官1名と大学生3名により行った。分類の結果、7つのカテゴリーが得られた(表6)。

表4. 自閉症・自閉傾向の診断の有無と「奇声を出すことが多くなった」の関連

		「奇声を出すことが多くなった」			
		あてはまる	あてはまらない	合計	
自閉症・自閉傾向	有	度数	7	18	25
		調整済み残差	2.4	-2.4	
	無	度数	2	34	36
		調整済み残差	-2.4	2.4	
合計		度数	9	52	61

$\chi^2(1)=5.91, p<.05$

表5. 自閉症または自閉傾向の診断の有無と「こだわりが強くなった」の関連

		「こだわりが強くなった」			
		あてはまる	あてはまらない	合計	
自閉症・自閉傾向	有	度数	6	22	28
		調整済み残差	3.0	-3.0	
	無	度数	0	37	37
		調整済み残差	-3.0	3.0	
合計		度数	6	59	65

$\chi^2(1)=8.74, p<.01$

表 6. 災害後の子どもの心身の変化に関する自由記述の分類カテゴリー

敏感 (3 件)	
・ 少しの体を感じる揺れに対しても「わっ、揺れた」と敏感になった	
・ 音に対して非常に敏感になった	
・ 雪道、でこぼこ道での車の中を怖がった (振動に敏感になった)	
地震への恐怖 (2 件)	
・ 天気の良い日は地震が来ると思っていて怖がる (中越地震の日も天気が良かったため)	
・ 地震後家に入れず、入っても必要なおもちゃを1つ2つ見つけるとすぐに外の車に逃げ込んだ。揺れの怖さを感じていたのだと思う。避難場所が閉鎖になる朝まで泊まり、19日間家で寝ることができなかった。その後も寝室が2階のため上がれず、下の仏間で3月20日まで寝た	
地震への不安 (2 件)	
・ よく余震の話をしてきた。今は減ったが当時 (1 年位) は毎日のように「今余震が来たら」と話していた	
・ 地震情報 (テレビの) が出ると不安になり、「又大きいのが来るよ」と落ち着かなくなる	
回避 (2 件)	
・ 地震の話をするのをいやがるようになった	
・ 地震が起きた時、一人で3Fに居たので、その後ずっと3Fに行かなくなった	
身体症状 (2 件)	
・ 中越地震は一日数回余震が何ヶ月も続いた。地震の予知なのかはわからないが、地震が起きる前に発作がおきたり、心拍数があがったりという時があった	
・ 地震の本を繰り返し見て、チックのような症状が出る	
退行 (1 件)	
・ 普通に医者診療や検査が以前出来ていたことが出来なくなり大変困っている	
特に対応に戸惑いを感じた変化 (7 件)	
・ 突然の大きな音などを怖がるようになった	
・ 災害での体験や失った体験を、繰り返かえし話していた	
・ ワゴン車の中で何日も寝ていたので、又その中で寝るのかと、時々くりかえして言葉に出す	
・ ひとりごとが多くなった	
・ 生活リズムが崩れるようになった。生活リズム、特に昼夜逆になり、なかなか生活のリズムに戻すのに時間がかかった	
・ 学校が不通になり、学校に行けない日が多かったので、家にいる日が多く生活が乱れた	
・ 必要以上に怖がった	

揺れや音に対して敏感であった様子は <敏感> とし 3 件であった。地震時の状況や、揺れといった地震の経験に基づいて怖がっていた <地震への恐怖>、「余震がきたらどうするか」「大きいのが来るよ」と地震に関する不安を口にしていた <地

震への不安> は共に 2 件であった。さらに地震を思い出す情報や場所を回避する <回避>、身体に変化がみられた <身体症状> も同じく 2 件であり、以前できていたことが出来なくなった <退行> は 1 件となった。子どもの心身の変化に関し

て特に戸惑いを感じた変化については、別枠として〈特に戸惑いを感じた変化〉とし7件の記述が得られた。

IV. 考察

1. 障がいにかかわらず子どもに共通した心身の変化

小学校の保護者を対象とした小林(2007)の調査結果では、「あてはまる」と答えた保護者が20%以上だった項目は、「暗がりやを怖がるようになった子どもがいた」(48.6%)、「保護者へ甘える様子が見られる子どもがいた」(22.9%)、「閉じられた場所に入るのを怖がるようになった」(25.7%)、「災害での体験や失った体験を、繰り返し話していた」(22.5%)、「突然の大きな音などを怖がるようになった子どもがいた」(21.4%)、であった。本研究でも上位にあげられた項目のうち、「暗がりやを怖がるようになった子どもがいた」「突然の大きな音などを怖がるようになった」、や「甘えるようになった」といった項目は共通していたと言える。つまり、障がいのあるなしに関わらず、災害後に子どもによく見られていた心身の変化はかなり共通した部分があったことがわかる。つまり災害時には、障がいのあるなしにかかわらず、子どもの支援を行う場合には、まず災害を体験したことによる心身の変化がどのような状態であるかを把握していくことが重要である。

2. 障がいの特性や程度に関連した心身の変化

小学校の保護者を対象とした心身の変化(小林,2007)では、「閉じられた場所に入るのを怖がるようになった」が25.7%であったが、本研究では9.3%であった。さらに「災害での体験や失った体験を、繰り返し話していた」は小林(2007)では22.5%であったが、本研究では14.7%

となり、小学生では見られていた心身の変化が障がいのある子どもでは少ない事がわかった。自分が体験したことや見た夢を他者に伝えることは知的な能力に関連するため、コミュニケーションに関連した点で違いが生じてくることは十分考えられることである。

一方、本調査では「よく眠れていなかった」、「パニックになることが多くなった」、「行動が落ち着かなくなかった」といった項目では高い割合であったが、小林(2007)の調査では低い数値であった。つまり、障がいのある子どもに起こりやすい心身の変化があったことがわかる。

次に、障がいのある子どもたちの心身の変化に関する先行研究である宮本(1995)と比較すると、障がいのある子どもたちに災害時に見られやすい問題行動の中で「生活リズムの乱れ」「恐怖・不安反応」「不眠」「食欲異常」「排泄障がい」「多動」「興奮」「パニック」「固執」「自傷」「癲癇症状」「けいれん」「発熱」「奇声」「活動性の低下・停止」「依頼行動の増加」に対応した項目について、本研究でも「あてはまる」の回答が得られ、宮本(1995)の研究と一致する結果となった。

(1)知的な障がいのある子どもの心身の変化

「災害での体験や失った体験を、繰り返し話していた」(表3)が、知的な障がい者が比較的軽い子どもに有意に多く見られた。話すことは知能に大きく依存するものであり、その結果、知的な障がい者が比較的軽い子どもは災害を通じた経験を話すことが出来た。藤森(1996)や西村ら(1999)は、災害ストレスを和らげるための方法のひとつとして、災害で感じた恐怖や不安などの経験を話すことをあげている。災害での体験を話すことは子どものストレス緩和に役立つが、知的な障がい

が重い子どもは自分の体験を話したりすることが難しいため、その子のストレスの緩和し安心感を得られる対応を個別に行っていく必要がある。

(2) 自閉症・自閉傾向のある子どもの心身の変化

「奇声を出すことが多くなった」(表4)、「こだわりが強くなった」(表5)の2項目において、自閉症または自閉傾向のある子どもに有意に多く現れることが明らかになった。2項目とも自閉症の特徴に深く関係する項目であり、自閉症という障がいがある心身の変化に影響することを示している。自閉症の診断基準の中には、反復常同行動ないし特定の物事を同じままにしておこうとする執着的な行動が含まれている。また、自閉症の特徴として、特定のパターンの変化に対して激しい混乱を見せることや、周囲の音に過敏に反応する側面があることが指摘されている(中根, 1999)。これらの点をふまえると、災害によってこれまでの生活パターンが一変し、かつ余震や復興作業などの騒音で落ち着かない状況下で、自閉症・自閉傾向のある子どもは多くのストレスを感じ、「こだわりが多くなった」や「奇声を出すことが多くなった」と考えられる。自閉症のある子どもは、災害による外傷体験だけではなく、災害によって起こった環境の変化に対しても、支援を強く必要としていることが改めて確認されたと言える。

(3) 医療的ケアが必要な心身の変化

また障がいのある子どもに出現しやすく、かつ時に命にかかわるリスクがあることから医療的ケアが必要になる心身の変化も見られていた。表2に示したように、「てんかんになることが多くなった」(3件)「けいれんが多くなった」(2件)の症状である。自由記述の中にも、「地震

が起きる前に発作がおきたり、心拍数があがったりという時がありました」との記述があり、障がいのある子どもの変化の中には、こうした心身の変化が存在することが明らかになった。心拍数が上がることに限っては、健常者と比較して慢性疾患をもつ者は被災後に動悸が多くなることが明らかにされている(辻内・吉内・嶋田・伊藤・赤林・熊野・野村・久保木・坂野・末松, 1996)。これらの変化が現れた原因として、災害による薬の損失や不足によって薬が服用できず、てんかん等の増加が引き起こされた可能性も考えられる。今後は医療的ケアが必要になる心身の症状への対応も含めて、災害時の障がいのある子どもへのケアや防災対策を講じていく必要がある。

V. まとめおよび今後の課題

災害時における障がいのある子どもの心身の変化は、①障がいにかかわらず子どもに共通した心身の変化、さらに障がいゆえに起こる心身の変化として、②障がいの特性や程度に関連した変化、そして③医療的ケアが必要な心身の変化、といった3つの心身の変化が見られたことが明らかになった。しかし、本研究では知的障がいなど障がいの種類や程度を詳しく尋ねていなかったため、自閉症以外の障がいや知的障がいの詳しい程度をふまえてについては、どのような心身の変化が特異的に見られたかを明らかにすることができなかった。また、年齢ごとの人数が少なかったために、年齢に応じた違いについて明らかにすることはできなかった。中越大震災は被災地域が新潟県中越地域に限られており、その地域にある特別支援学校の数も少なく、こうした解析を行うことには限界があった。そのため、今後の研究において検討されてい

く必要があるだろう。

謝辞

本調査の実施に際して、大変な状況の中、快く回答していただきました保護者の皆様、そしてご協力を頂きました新潟県中越地域の特別支援学校の先生方、静岡県立富士特別支援学校の大石啓文先生に心より御礼申し上げます。

文献

- 藤森和美 (1996) 『子どものトラウマと心のケア』, 誠信書房.
- 小林朋子 (2007) 児童を持つ保護者が災害発生時におかれた状況とその支援のあり方. 静岡大学教育実践総合センター紀要, 14, 103-109.
- 小林朋子・望月香緒莉 (2009) 災害時における障がいのある人の困難とその支援に関する研究の展望. 障害理解研究, 11, 49-59.
- 宮本信也 (1995) 災害時の障害児に生じる問題とその対応に関する研究—阪神・淡路大震災下の特殊学校における状況の検討から—. 研究助成論文集(安田生命

社会事業団), 31(1), 114-121.

- 中根晃 (1999) 自閉症その科学的理解, 中根晃編著『自閉症』, 日本評論社, 1-16.
- 西村亜希子・西田裕紀子・斉藤誠一・神藤貴昭・奥田剛・斉藤真子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中考尚 (1999) 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究VI—第6回調査報告—, 神戸大学発達科学部研究紀要, 6(2), 269-277.
- 白橋宏一郎・横山奎吾・谷津久子・畠山博・木村成道・目黒保伯・小野寺たみ (1980) 宮城県沖地震に伴う障害者の反応. 精神医学, 22(6), 625-638.
- 辻内琢也・吉内一浩・嶋田洋徳・伊藤克人・赤林朗・熊野宏昭・野村忍・久保木富房・坂野雄二・末松弘行 (1996) 阪神淡路大震災における心身医学的諸問題(Ⅱ)身体的ストレス反応を中心に, 心身医学, 36(8), 657-665.
- Yule, W. & Gold, A. (2001) Wise before the Event. 久留一郎訳『スクール・トラウマとその支援—学校における危機管理ガイドブック』, 誠信書房.

Mental and Physical Changes in Children with Impairment in Disaster

In the present study, mental and physical changes with regard to the characteristics and level of impairment of children with impairment were examined through interviews with the guardians of the children. The following three aspects of mental and physical changes in children with impairment were determined: (1) Changes in the mental and physical conditions regardless of impairment, (2) Life-related changes, and (3) Changes related to characteristics and the level of impairment. To develop the health care and disaster prevention systems for children with impairment, planning in terms of these three types of mental and physical changes is required.